

戦後アナキズム運動史年表 5

(一九六五年～一九六八年)

運動史研究会

戦後アナキズム

運動史への視座

中村 隆 司

我々は、近年いくつかの日本アナキズム運動史を手に入れることができた。六八年以後の一つの喜ばしい成果である。と同時に、戦後アナキズム運動の数々の成果の一つでもある。我々アナ連以後の世代にとって、これ等が公刊されたということは、まさに意義深いものと言えるだろう。

六六年の頃には、アナキズム関係の理論書等は数える程しかなかった。戦前の春秋社版『世界大思想全集』を、古本屋の隅から

探し出して読んだことを思えば、現状は昔日の感がある。一般理論書でさえ、こんな有様であったことからして、『日本アナキズム運動史』等、望み得べくもなかった。

確かに、戦後の日本の一隅に、全国組織は存在していたし、それはそれなりの資料やパンフを刊行していたようである。しかしながら、その活動は、ごく微々たるものにすぎず、組織の結節点ともなるべき重要論文・文書等のアピールは、極めて少数の者の間をまわっていたにすぎない。大衆的に開かれた視野をもった運動ではなく、一部の愛好家の間の私的な領域に閉ざされていたといっても過言ではなからう。

こうした状況は皮肉にも、六八年、アナ連の解散以後、次第にその様相を変じていった。そうした成果の最大のものの一つに、小松隆二著『日本アナキズム運動史』を数えあげることが多分間違っていない。もちろん、その他雑多な理論書の公刊のしかたについて、疑問をはさむ余地もあるが、その点はただ力量不足と言うにとどめておこう。ともあれ『日本アナキズム運動史』公刊の意義は、理論的にも実践的にも極めて幅広く奥深いものを内抱しているように思える。著者小松氏自身もふれているように、我

が国の社会思想史および社会運動史上に、不当にも空白を強いられ、てきたアナキズム運動および思想の流れを大衆的に明らかにし、且つ、その流れを対象化しうる形で提出したことに意義がある。些細な事実認識をめぐって、あげつらいもあるようだが、我々は大筋を見失ってはならない。いづれは、我々の実践が一度は必要とする所であろうが、日本の近代化の道程におけるアナキズム思想の意義とは何であったのか、そして何であるのか。そうした歴史的視座での検討を、我々に可能ならしめる一里塚であることを銘記したい。

だが、こうした意義を踏まえた上でも、なお遠くにあつて木魂するその鎚音に、じりじりしているのは、一人私だけではあるまい。我々が戦後アナキズム運動史を問題にするのは、「少しでも現在に近い所を」といった思いと、我々戦後の世代にいまだその実感を残している歴史の實在感のみならず、少なくとも直接的に現在に連なった状況を把握しようと考えからである。我々は、時代を溯行してゆく方法を選んでゐる。

なる程、未だ歴史的浄化を経たとは言い難い四五年から六八年を対象にする危険は、常に我々につきまといて離れないだろう。だが、そうした危惧をふりはらって、これに取り組むということとは、我々が一つの実践的な立場、視座をうち出すということと同義なのである。もう少し強く言えば、それは現在および今後の我々の実践の基本的なイデオロギーを暗に或いは明確に示すということである。『日本アナキズム運動史』及びアナ連を乗り越えてゆく、一つの方法を我々はこうした視座で示しようと考ええる。

では、我々は如何にして、こうした立場を取るにいたったのか。

二

これを語るには、六八年を前後とする一連の闘いをいかに評価するかという我々自身の直接的な課題を抜きにしては考えられない。五六年のハンガリア動乱以後、ようやく揺らぎ始めた日本の左翼運動の混沌と模策、そうした大きな流れの中での、我々の位置と状況に対する展開の質。こうした視座を持ちえない限り、新たな展開は期待できない。「アナキズム運動は、未だ確固たる方法論を持てているとはいえない」となどと、したり顔で、何万遍唱えようと、何ものもできてはしない。

私はこう考える。我々に、欠けていたものの一番大きな事は、蓄積ではなかったのか、と。年代的にも階層的にも重層化された経験と思想の蓄積であり、その上に立った現状分析と運動の方法である。

新左翼諸党派は、六〇年以降の活動の蓄積を持って闘い、日共はその何十年に及ぶ蓄積を基盤にしている。しかるに、アナキズム運動は、その微々たる組織さえも解散させてしまった。闘うべき時に、自らの組織的蓄積の全てを、自ら役に立たないものとして、投げ捨てたのである。これは銘記されていい。戦後の蓄積を、組織的な形では、遂に提出できなかったのである。このアナ連の解散に関する総括は、未だなされてはいない。「運動など何もなかった」「解散には反対であった」等々という言葉は今もって語る人々が存在し、解散の意義すら未だ消化していないとするならば、アナ連は自然消滅したのだといっていいだろう。

運動とは一つの選択を行為するものである。自らの方向性を鮮明にするということは、自らの出自およびその延長線上の立場を

明確にすることであり、曖昧さを排除することに他ならない。

こうした視角をもって、戦後アナキズム運動を見るならば、この運動は実に乱雑・雑多な未整理の、やりかけの運動を、そこに残したといっているに過ぎない。しかも、六八年十二月に、アナキズム連は、自ら、そうした過去の一切に目もくれず、その生命を断つてしまった。そこに残された、膨大な資料と幾多の努力は、自ら投げ捨てられ、顧みる為には、考古学的な努力を要する有様になってしまった。この小さな雑多な流路は、組織的なものとしては殆ど体をなしていず、全ては私的な所有の内に、ほこりをかぶってしまっている。

我々が、少なくとも自らのイデオロギーとしてアナキズムを体現しようとするならば、こうしてチリにまみれ、私的な所有の内に埋没してしまっている、過去の歴史を、クモの巣を払って、白日の下に引きずり出し、正しくその納まるべき戸棚に並べかえてやらなければならない。亡霊は納まるべき所に納めてやらなければならない。説明するという事は、いたづらに批難したり、心酔したりすることではない。あり得べき歴史の中で（従って、戦後の日本史の中で）正しく、その比重ならびに関係を見据え、評価すべき所は評価し、遺棄すべき所は遺棄することである。その作業が、自らの立場、思想性を鋭く問うことになるのは言うまでもあるまい。しかも、この作業は、直接に我々の現状分析に連なる一連の作業の一環である。こうして、我々は戦後左翼運動総体の中での、アナキズム運動の蓄積を我がものとなしうと考えるのである。

しかしながら、既に指摘したごとく、この作業には考古学的な

努力、努力の集中が必要とされる。我々は学者のように金をもらって暇を持っているわけではなく、日々僅かな賃金を時間とエネルギーの代償に得ている身であれば、残された僅かの時間に、完璧を期すということは無理な話である。だが、我々の出来る範囲での最上のものと、後日誰かが完成させてくれるであろうという期待を込めて、一つのたたき台を提出すること位はできるだろう。

三

ここに、極めて不完全ではあると思うが、年表の完成をみた。

既に一年余の歳月を送っている。この年表を見れば、戦後の大体の流れがみえると思う。その幾つかの結節点を拾いあげてみても、運動にとって、どうしても避けては通ることのできない問題が横たわっていると思うし、そうした問題の一つ一つに回答を与えることが、今後の我々の展開を決するようにもみえる。こうした成果は逐次明らかにされてゆくことと思う。が、それと共に、戦後史資料の刊行によって、我々は大衆的に戦後アナキズム運動の質を明らかにしたいと考えている。

このことは、一昨年半ば頃より顕著になってきた。全国連合結成への動きとも無関係ではない。準備会や合宿が関西を中心にして様々な形でもたれ、いたる所で話し合いが持たれてはいるようだが、その中に未だ釈然としない混乱と狭さを感じるの、一人私だけではあるまい。そして、その一因が、イデオロギーの曖昧さにあるというのも、多分間違っていないだろう。誤解を恐れずに言えば、我々の最大の課題は、まず日本一国を相手にしうる

だけの強靱なイデオロギーを構築することと、それを左右するに足る組織を獲得することにある。

戦後の週刊平民新聞は、少なくともそうした志向性を持っていた。政治・経済・社会・文化の多方面に、その方向性をもととしていた。これは、生きた現実である。我々が、こうした過去の試みの崩壊の意味を遂に見出しえないとするならば、我々は同じ誤りを再び繰り返すことになるかもしれない。

なるほど、運動の地方的閉塞という限界は、全国組織の不在を一因とするものかもしれない。が、イデオロギー的一致を前提とする全国連盟を形成する為には、現時点での水平的な連合のみならず、時間を軸にした歴史状況の把握という縦軸をも考えなければなるまい。否、むしろこうした縦軸をいかに把握するのかもしれない。ところが、イデオロギー的一致、をより豊かに可能ならしめ

るであろう。

我々は、全国連盟を組織化するのではなく、いかにして自身を全国連盟に組織化してゆくのかを問題にしたいと思う。その第一歩として、戦後運動史研究会の活動を位置づけていることは、いうまでもない。

この作業の最大の眼目は、過去の蓄積の全てを我々のものとすること、現状分析へむけた方法論の獲得、イデオロギーの獲得、といった三点に絞られよう。その後にはひき続き、六八年を前後する情況の分析を予定している。

以上、研究会参加希望者は、編集部まで。

1965年		
1・13 東京地協例会	ア ナ キ ズ ム 運 動	出 版 活 動
1・23 大逆事件記念集会（東京）		
1・26 アナ研（東京）		
2・7 GAの会例会		
2・25 アナ研（東京） を迎えて エスペランチスト・伊東三郎		
2・28 青年アナキスト連盟結成される	出 版 活 動	社 会 的 な 状 況
1・1 自連105号		
1・17 連盟ニュース		
2・1 自連106号。無政府共産党からの簡単なコメント（松田政男）		
2・15 イオム通信第一号（向井孝）		
3・1 自連107号。論争をひし返そう（井原）	出 版 活 動	社 会 的 な 状 況
4・1 自連108号。アナキズム革命論の難点を		
1・11 中教審 ・期待される人間像を 発表		
2・1 原水爆 禁止国民会 議結成		

3・7	九州地協研究会	2・7	ベトナムで北爆が開始される
3・8	阿部英男(東京地協員)死去		
3・21	GAの会例会		
3・22	アナ研(東京)	2・10	三矢研
3・25	東京地協例会		
4・4	伊藤和(詩人)死去	4・24	ベ平連
4・11	GAの会例会		
4・13	佐々木欽一(旧印刷工連組合員)死去		
4・19	アナ研(東京)	6・22	日韓基
4・24	市民・文化団体によるベトナム反戦デモにアナ連・WRI・クラブなどから参加。この直後「ベトナムに平和を!市民・文化団体連合」発足	10・12	日韓条約批准阻止で杜共統一行動。〓批准阻止行動が展開される
5・17	アナ研(東京)		
6・16	アナ研(東京)		
7・1	反選挙大集会(東京・西部労政)	12・11	日韓基本条約成立
	アナ連・青年アナ連・クラブ・無政府共産党・早大自由思想研・明大青騎士団・法大アナ研・外語大TAF・早大TAFの9団体が主催		
7・21	アナ研(東京)		
7・31	世界エスペラント大会開かれる		
	井・遠藤・青島・大道寺らがWRI部会に参加		
8・18	アナ研・東京		
4・1	めぐって(大沢)		
4・15	連盟ニュース		
5・1	戦争抵抗者10号。アメリカよアジアから手をひけ!		
5・1	自連109号。ベトナム解放戦線支援の呼びかけ(BBM)		
5・1	労働者は人民を殺すな!―ビラ(青年アナ連)		
6・1	自連110号。〓ベトナム戦争をどう受とるか(向井)		
6・25	戦争抵抗者12号。非暴力の戦術		
8・1	自連111号。毛沢東とアナキズム(玉川信明)		
8・	抵抗通信1号(福岡・井原末九郎)		
9・1	自連112号。1965年夏広島		
10・1	無政府主義運動52号。水沼辰夫追悼号		
10・1	自連113号。エスペラント・その現状と問題点(向井)		
10・20	抵抗通信。大正退職者同盟からの報告(河野)		
11・1	自連114号。ヤマネコストライキかゼネラルストライキか(大沢)		
12・1	自連115号。〓どうするか平和運動を(向井)		
12・	黒色戦線1号(発行・青年アナキスト連盟)		

1966年		
8・22	GAの会例会	
8・25	水沼辰夫(クラブ員)死去	
9・15	アナ研(東京)	
10・20	法大大学祭で大沢が講演	
10・20	アナ研(東京)	
10・22	京大大学祭で秋山が講演	
10・23	水沼辰夫を語る会(東京・全通)	
11・11	東京地協例会	
11・11	日韓批准反対デモで笹本・赤羽・松田ら逮捕 される	
11・17	アナ研(東京)	
11・21	アナ連第15回全国大会	
12・4	長沢弥六(宗教的アナキスト)死去	
12・10	大逆事件再審請求 東京高裁で却下	
12・15	アナ研(東京)	
毎月一回、各地協ごとに定例の会合		
毎月一回、東京でアナキズム研究会		
毎月一回、東京でアナキストクラブ例会		
1・19	アナ研(東京) シンパナを迎えて	
1・24	大逆事件再審却下抗議集会(東京・私学会館)	
2・3	望月辰太郎(旧「小作人社」同人)死去	
1・1	自連116号。議会制民主主義の神話(大 沢) ※ヴェトナム休戦に思う(三浦)	
2・1	自連117号 ※非暴力直接行動へ(向井)	
2・10	早大全 学共闘会議 大学本部を	

2・16	アナ研 (東京)
3・16	アナ研 (東京)
3・18	水沼辰夫 無名戦士の墓に合葬
4・1	コスモス 20周年記念展示会 (東京)
4月	関西で青年アナ連高校生会議結成され、それを母体に革命思想研究会が結成される
5・29	京都アナキスト連盟 (KAF) 結成される
5・29	大道寺三郎 (連盟員・WRI会員) 死去
6・	京都でウェーユ研究会はじまる
6・20	スペイン革命30周年記念集会 (東京・全電通) 主催・アナ連 大沢・遠藤・斉藤竜鳳・松尾邦之助 他
6・24	アナキズム講座1 (東京) 大沢
6・27	アナキズム講座2 (東京) 秋山
7・1	アナキズム講座3 (東京) 遠藤
7・2	スペイン革命シンポジウム (東京) 主催・現代思潮社 山内明 他
7・4	アナキズム講座4 (東京) 大沢
7・8	アナキズム講座5 (東京) 秋山
7・9	スペイン革命記念集会 (京都) 主催・KAF 向井・遠藤 他
7・9	石井鉄 (古いアナキスト) 死去
7・10	秋山清還暦の会 (東京・新宿)
7・11	アナキズム講座6 (東京) 内村
7・15	アナキズム講座7 (東京) 綿引

5・1	※反戦・平和運動と民族解放戦争 (大沢) 自連119号 ※暴力的革命観からの解放 (向井)
5・5	労働と解放1号。大衆のなかの権力 (田中)
6・1	自連120号 ※平和運動と解放運動 (向井)
6・15	無政府主義運動52号
6・26	連盟ニュース (神戸)
7・1	自連121号。スペイン革命30周年記念に際して
8・1	自連122号 ※ベトナム人民との連帯とは何か (向井)
9・1	自連123号 ※なぜ行動できないか (向井)
10・1	自連124号 ※ベトナム戦争の行方 (向井)
11・1	自連125号。ベ反委活動を開始す
11・5	労働と解放2号。禁欲主義からの解放 (大沢)
11・6	反戦通信4号 (ベトナム反戦直接行動委員会)
11・10	連盟ニュース
11・15	無政府主義運動54号
11・20	黒の手帖1号 (東京・黒の手帖社)
11・25	反戦通信号外。軍需工場攻撃者は訴える
11・30	反戦通信5号
12・10	連盟ニュース (常滑)

3・7	紀元節 復活問題
3・25	明治百年記念問題
5・30	米原子力潜水艦、横須賀初入港
7・4	新東京 国際空港・三里塚に決定
9・17	紀元節 復活反対国民集会
10・21	総評、ベトナム反戦統一ストを決定
11・29	3次防を決定

7・18	アナキズム講座終(東京) 長谷川
7・19	第2回スペイン革命30周年記念集会(東京・看護会館) 篠原・大沢
8・3	春日実(クラブ員)死去
9・	大逆事件再審請求却下の特別抗告、最高裁大法廷へ
9・17	吉田一 死去
10・1	ベトナム反戦直接行動委員会 結成される (以下ベ反委と略す)
10・19	ベ反委 東京・田無市の日本特殊金属K・Kに兵器生産即時停止を訴え抗議行動。配電盤スイッチを壊すなどして4名逮捕される。 (「田無事件」と呼ばれる)
11・14	石川三四郎記念講演会(東京・私学会館) 三浦・鶴見ら講演
11・15	ベ反委 名古屋市の豊和工業K・Kに抗議行動。6名逮捕される
11・19	田中勇之進(クラブ員・旧ギロチン社)死去
11・19・20	アナ連第16回全国大会(名古屋)

毎月一回、各地協ごとに定例の会合
毎月一回、東京でアナキズム研究会
毎月一回、東京でアナキストクラブ例会

1・	松村潔、「無告窓」の署名でこの直後の参院選への棄権を訴えるハガキを各地に発送	1・1	自連126号。ベ反委の直接行動つづく	2・11	初の建国記念日
1・6	大阪アナキズム研究会 結成される	2・1	自連127号 ※「兵器工場攻撃」の総括として(大島)	3・29	恵庭事件無罪判決確定
1・	アナ研(東京)がこの36回目より、「リベルテールの会」と名称を変更	2・	連盟ニュース3号	10・8	第一次羽田事件・山崎君虐殺さる
1・20	宮崎秀人(クラブ員)死去	3・1	自連128号 ※革命的生産者へ(杉藤)	11・2	沖繩即時無条件返還要求県民大会・沖繩
1・24	大逆事件記念集会(東京・雑誌会館)	3・2	反戦通信7号。軍需産業の実態	11・11	エスペランチスト
1・26	10・19事件公判対策会議(東京・学士会館)	3・7	直接行動12号	11・12	比忠之進首相の北爆支持に抗議し焼身自殺
1・30	ベ反委・0電器労組懇談会	3・25	労働と解放。君はどのような労組を望むか	11・12	第二次羽田事件・佐藤訪米阻止抗議デモ
2・6	10・19事件報告会(東京・雑誌会館)	3・	連盟ニュース4号		
2・7	安田君子(向井孝夫人)死去	4・1	自連129号 ※反戦の人民意志を貫く(藤本) ※「アナキズム復権説」の批判(外村)		
2・12	岩佐作太郎死去	4・1	反戦通信8号。砂川基地拡張阻止闘争に起て!		
2・15	リベルテールの会	4・10	無政府主義運動55号。岩佐作太郎追悼号		
2・26	ベ反委 非暴力直接行動委懇談会	4・16	連盟ニュース5号		
3・	黒層社開設される。青年アナ連、学生アナ連、アナルコサンジカリズム研究会の事務所となる	4・20	黒の手帖2号		
3・5	名古屋地協例会	4・29	Saluton 2号		
3・5	KAF例会	5・1	自連130号。形骸化したメーデーを戦闘的に打ち破れ	11・12	第二次羽田事件・佐藤訪米阻止抗議デモ
3・8	ベ反委合宿(静岡)	5・1	反戦通信9号		
4・	早稲田コミュニケーション結成される	5・14	連盟ニュース6号		
4・8	岩佐作太郎を偲ぶ会(東京)	6・1	自連131号 ※ベトナム戦争を契機に(無告窓)		
4・13	大阪アナ研第3回	6・1	連盟ニュース7号		
4・21	大阪アナ研第4回				
4・22	アナ連文学集団第1回研究会(東京)				

4・23	ベ反委・非暴力の会懇談会（東京）
4・28	東京地協例会
4・30	メーデーへ向けた集会（東京・渋谷労政）主 催・アナ連・ベ反委
5・	KAF 花大自治会執行部に選出
5・7	名古屋地協例会
5・8	法政大アナ研 結成される
5・28	砂川現地闘争にベ反委参加する
6・1	8 アナキズム講座（東京） 主催・青年ア ナ連 協賛・学生アナ連
7・20	リベルテールの会（東京） 宋世何
8・6	笠原勉（関西地協・労働と解放社）
8・28	田無事件第1回公判流れる（法廷で集会など の行動）
9・7	田無事件第1回公判（1名逮捕される）
9・10	田無事件第2回公判（法廷でコショウを散布）
9・15	二見敏雄（戦前の無政府共産党員・元連盟員）
9・21	リベルテールの会（東京） 磯谷 死去
10・	西山勇太郎（詩人）死去
10・19	リベルテールの会（東京）
10・20	新明和工業ヘデモ（ベ平連大阪・神戸行動委） 労働と解放社が参加
10・21	栄健（ベ反委）自殺
10・22	GAの会例会
10・29	東京地協例会

7・1	自連132号。沖縄の解放にたたかえ
9・1	無政府主義運動56号
9・1	労働と解放4号。JC加入後のわが単組
9・10	公判ニュース1号（ベ反委）
9・20	黒の手帖3号
10・1	自連134号。激動する沖縄から（尾関）
10・10	連盟ニュース10号
10・21	大阪あなきずむ1号（大阪アナキズム研究会） 。一学生の死（因幡）。反戦運動と共同体（尾 関）
11・1	自連135号。「羽田」は暴力か
11・12	労働と解放5号。ベトナム反戦と労働者
11・18	大阪あなきずむ2号。ブーバー特集
12・1	無政府主義運動57号
12・1	自連136号。由比さんの焼身自殺の抗議 （山鹿）

1968 年		
11・2	ベ反委第3回公判	
11・18	シンポジウム「現代アナキズム・その思想と行動」(大阪) 主催・GAの会・アナ連	
11・18	放同盟の試案提出される	
11・25	群馬大で秋山が講演	
12・7	栄健君追悼の夕(東京)	
12・10	関西アナキスト学生連合結成される	
12・31	黒層社解散 各団体の事務所が移転	
12・	ふもとの家 完成する	
毎月一回、各地協ごとに定例の会合		
毎月一回、東京でリベルテールの会		
毎月一回、東京でアナキストクラブ例会		
1・10	伊福部隆彦 死去	
1・11	青山大学(連盟員・広島県三原) 死去	
1・18	リベルテールの会(東京)	
1・21	クラブ新年会(東京・目黒)	
1・24	大逆事件追悼記念集会(東京・雑誌会館)	
1・27	長谷川武「人類史観概要」出版記念会(東京)	
2・15	リベルテールの会(東京) 秋山清	
2・18	アナキズム講座1(大阪) 大沢正道 主催	
1・1	自連137号。労働者管理の旗を掲げよ	
2・1	自連138号。佐世保特集(山口・尾関・杉藤)	
3・1	自連139号 特集・直接行動論の展開(大峰・上仲・山下・向井・尾関)	
3・10	無政府主義運動58号。革命論(和田俊一)	
3・31	労働と解放6号	
3・	大阪あなきずび3号 バクーニン論	

2・19 24	・大阪アナ研 林俊衛遺作回顧展
2・22	ベ反委 日特金と周辺にピラ撒き
2・25	アナキズム講座2 (大阪) 磯谷武郎
3・3	アナキズム講座3 (大阪) 山口英
3・18	解放運動犠牲者として岩佐作太郎・七重 合葬される
3・21	神戸アナ研 結成される
4・18	リベルテールの会 (東京)
4・20	早大アナ研講演会
5・1	背叛社 メーデー会場で民青部隊に突入 (東京)
5・3	関西反戦労働者連合 結成される (尼崎)
5・12	第1回都内学生アナ研連絡会議 (早大・中大・一橋大・法大・立大)
5・18	関西反戦労連 関西ベ平連の大阪駅前坐り込みに参加
5・25	7月反選挙闘争委 結成
6・	アナキスト行動戦線 関西反戦労連より分離発足
6・	黒色戦線社 結成 (群馬で反選挙ステッカ ー)
6・2	第2回都内学生アナ研連絡会議 (早大・立大・洋大・一橋大・明学大・法大・東海大)
6・9 13	春季アナキズム講座 (東京・中大) 主催

4・16	連盟ニュース13号 (名古屋)
5・1	無政府主義運動59号
5・15	連盟ニュース14号
6・	アナルコス創刊号
7・1	自連142号。革命へ胎動するもの (パリ 発・尾関)
8・1	自連143号。反選挙再検討の思いつき、 (蓮台寺)
8・10	無政府主義運動60号。官僚化した労組の幹部
8・11	連盟ニュース16号
9・1	自連144号。革命国の民衆はなぜしゃべらぬ?
9・9	労働と解放7号。反戦運動と組織的矛盾
10・1	自連145号。国際アナ連大会報告 (大沢)
11・1	自連146号。北爆停止とベトナム反戦運動 (向井)
11・11	無政府主義運動61号
11・	大阪あなきずむ4号
12・	リベルテ1号
1969年1月1日	自連147号 (終刊号)。日本アナキスト連盟の解散と「自連」の出版 (大峰)。解散の感想 (三浦)

背叛社

6・15 関西反戦労連、日本油脂大阪工場前坐り込み

6・17 山谷暴動で都内アナ研連の3名が逮捕

6・26 反選挙シンポジウム(東京・全電通) 主催

反選挙闘争委

6・29 背叛社、日共本部に火炎ビン投げる

7・7 反戦・反選挙集会(尼崎) 主催・関西反戦労

連、関西アナ学連、GAの会

7・9 第3回都内大学アナ研連絡会議(法大・洋大

・早大)

8・3 第4回都内大学アナ研連絡会議(洋大・法大

・早大・国学院大)

8・20 大沢正道君の会(国際アナキスト連盟大会渡

航と「大杉栄研究」出版記念)(東京) 背叛

社グループ、大沢を殴打

8・30 伊串英治(連盟員)死去

8・30 都内大学アナ研連

9・26 青木真子(青木弘夫人・大杉栄の長女)死去

10・ ふもとの家開設される

10・5 青年アナキスト討論会(名古屋) 主催・

関西学生アナ連・名古屋学生アナ連・関西反

戦労連・アナキスト行動戦線

10・6 松村潔(「無告窓」)死去

10・6 背叛社で爆発事故(東京)

10・7	野中俊治(クラブ員)死去
10・12	国際アナキスト会議報告会(東京)
10・19	救援決起大会(東京)
10・	駒沢大アナ研結成される
11・	印友会 結成される
11・16	愛知県社会運動家顕彰追悼祭で小川・伊串の両名合葬される
11・23	アナ連第18回全国大会(名古屋) 全員
11・23	一致で解散を決議

毎月一回、各地協ごとに定例の会合

毎月一回、東京でリベルテールの会

毎月一回、東京でアナキストクラブ例会

本号で不十分ながら、戦後アナキズム運動史年表の連載が完結ということになります。この連載の間に、何人かの方から貴重な御指摘をいただきました。一瞥しても明らかなように未だ精密度はかなり低いと言わなければなりません。というのも資料的不充分さもさることながら、切日に追われて粗雑なまま掲載してしまつた部分も多々あるためです。さて、年表の補足・改訂等についてですが、出来るだけ本誌上に逐次掲載したいと思ひますので、更に資料の提供・ご指摘をお願いします。とりわけ不十分と思われるのは次の部分です。一、日労会議での活動 二、日本自治同盟、自由社会主義同盟の活動 三、学生・青年層の活動 四、連盟

・クラブ以外のグループの動き(例えば「アフランシ」誌、個の会など) 五、文化運動のグループの活動(例えばIOM同盟)

今後は年表をもとにした理論・運動上の問題の検討にも徐々に入っていかねければなりません。その面でも協力と参加をおねがいします。とりわけ実際に運動に参加してきた方々の一層のご協力を必要とします。具体的な事実の確認などは当時の印刷物による他ないのですが、その印刷物自体がかなりの散逸状態にあり、かなり困難になってきています。当初は「たかだか20〜30年」と思っていたのですが、どうして簡単にはいきません。

会員制への移行について

反権力・反国家・絶対自由の思想と運動とに關する、過去、および現在の文献、資料、運動紙誌を収集・整理し、その完全な保存を図るとともに、利用者に広く公開すること——を目的とした日本アナキズム研究センターが発足して早くも四年目を迎えます。

この間、多くの人々の協力と支援によって書庫の建設、図書収集、蔵書の整理が進められてきました。研究センターの現状は、静岡県富士宮市の龍武一郎方にある五坪余りの書庫に、蔵書はアナキズムを中心とした約二千点の単行本、ダンボール十数箱分の整理途中のミニコミ、パンフ類、雑誌等です。また、昨年十二月から同市内に作業、宿泊、閲覧のために分室が確保され、作業の円滑化が図られています。しかし現在のところまだ公開できる段階には到っていません。

従って、四年目を迎えた研究センターの課題は、まず公開できる体勢をつくっていくことにあります。また、現在の書庫では近い将来図書、文献類を収納しきれなくなり、さらには公開のための物理的条件も現在の建物では不十分であることから、別個に新たな土地と建物を獲得することが必要となっています。これらを含めて、今後の課題を列記すると、

① 管理体制を整え、研究センターの実務を円滑に処理できるようにする。

② 専従の管理者の常駐を含む、財政的基盤を確立する。

③ 研究センター公開の計画案を早急に検討する。

④ 独立した土地と建物（書庫、閲覧、宿泊設備）の確保を中心に長期的ないしは中期的な計画を作成する。

これまでの研究センターの活動は、龍武一郎を中心に有志十数名が活動の実質を担当し、また、研究センターの広範かつ長期的な発展のために相談役として大沢正道・長谷川進・向井孝の各氏に管理・

運営の全般にわたって助言を受けて来ました。その財政的基盤はすべてカンパに依拠し、具体的活動は月一回の例会を中心に、有志の自主的参加と責任に基づいて取り組まれて来ました。

しかし、活動の内容が多岐にわたり、仕事の量も増えつつある現在、増大する通信その他の事務を的確に処理し、運営の円滑化と一層の発展を支える基盤の構築が望まれています。そのためには、従来の有志による活動体勢をさらに発展させていくことが要請されているといえます。こうした現状をふまえ、数次の討議を経て、「会員制」による研究センターの再編成を図ることにしました。会員制によって財政の長期的安定を確保し、同時に専従者体勢を確立し、さらには会員へのサービス業務として研究センターの部分的公開を行なうなど、活動の一層の展開を達成したいと考えます。

〈規約〉

目的

日本アナキズム研究センター（以下センターと略す）は、反権力・反国家・絶対自由の思想と運動に關する過去および現在の文献・資料・運動紙誌を収集・整理し、その完全な保存を図るとともに、利用者に広く公開すること、を目的とする。

構成

センターは、センターの目的と活動に賛同し、かつ会費（年間一口二、〇〇〇円以上）を納める者をもって構成する。

活動機関

1. センターは、目的達成のために必要な諸活動を行う。そのために例会（代表者・龍武一郎）を定期的にもつ。

2. 例会は、会員の自主的参加と責任のもとに運営される。

3. 例会は、会員に対して年一回、活動および会計報告を行う義務をもつ。

一九七四年六月一日

静岡県富士宮市杉田二五一
日本アナキズム研究センター
（代表者・龍武一郎）